

# 中年女性のための鎮魂曲

——『ダロウェイ夫人』の心理学的考察——

伊 藤 太 郎

## A Requiem for Middle-aged Women

——A Psychological Study on *Mrs. Dalloway*——

Taro ITO

Virginia Woolf (1882～1941) の第 4 番目の長編小説 *Mrs. Dalloway* (1925 年出版) は、彼女の小説の中で恐らく一番愛読されている作品であろう。その理由は、他の作品のどの登場人物と比べても、Clarissa Dalloway が characterization の点で一段と女性的な、生き生きとした存在感や実在感を煌かせるからである。魅力だけではない。女性であるが故の欠陥も、幾つか内在させている。女性であるが故の魅力と欠陥が、本題的な弁証法を必要とする程に渾然一体となっていると言えよう。又、作者 Woolf の体臭を赤裸々に振りまきながら、女性の「生」の歓びと恐怖、安らぎと苦悩を存分に披瀝しているという意味でも、一層余計に、Clarissa に寄せる作者の愛着を感じない訳にはいかない。この作品にあって、Clarissa は、分裂病患者の Septimus と並んで、格好の人間研究の対象なのである。この小論では周到に創り上げられた、彼女の女性としての全体像を探る中で、「女性である」ことの両価的な意味、女性的な生命原理のメカニズム、魂の「癒し」の問題などを考えてみたいと思う。有名な feminist であると同時に、実生活で深刻な精神病に苦しんだ Woolf であるが、その作者の分身的存在の Clarissa が陥る「女性らしさの病い」や「空の巣」症状を考察することは、中年女性層の精神的危機が特に関心を集めている昨今、有意義なことではないかと考えるからだ。

### I

Clarissa Dalloway が魅力に満ちた女性であることに異論はなかろう。齢 52 歳、顔をよぎる疲労の気配と色香の衰えは否めないものの、周囲の貧しい、孤独な人々の心情を思いやる、母性的な優しさをたたえている。自分の分を弁える慎ましさを備え、中性女性特有の鼻をつく、あの潔癖症気味の道德観を振りかざす訳では決してない。こよなく人生を愛し、陽気に、しかし毅然と人生に立ち向かう姿勢は、人々の強い共感を呼び起こさずにはおかない。何不自由のない恵まれた環境の中に安住しつつも、なおかつ精神的純潔さを失わない。閑僚になる機会は逸したが、良識と善意の保守党国会議員である Richard Dalloway の妻として、万事怠りなく家事を切盛りする。その意味では、従順で貞淑な、いわば伝統的な女主人像である。又、元来イギリス有産階級の婦人達は party 好きをもって任じなければならぬが、この Clarissa も party のこととなると、「お祭り騒ぎをするのは馬鹿げている。子供みたいだ」(134) と彼女の病後の健康を気遣って心配をする夫もよそに、接待役として「完璧なる女主人」(69) であろうとする程である。生来の快活な精力家と呼ぶべきか、堅実な社交婦人として皆の信頼と敬愛を集める存在でもあるのだ。

Clarissa の魅力は、確かに、節制のある享楽主義者として中庸をもって現実世界と慣れ親しむ生き方にあろう。「青緑色の、軽やかで敏捷な鳥」(6) となって、生命躍動的に「今」を生きたことこそ、彼女の本望とするところだ。たとえ何の取り柄もない有閑夫人の身の上であれ、創造的に瞬時瞬時を燃焼させようという透徹した意志が際立っている。「彼女が細やかな出来事を如何に愛し、あらゆる瞬間を如何に愛したかは、誰も知らない。」(135) とする作者の好意的弁護は、何も彼女の享乐的な利那主義を強調するためではない。情性に流されずに、瞬時新たな自己実現を果たそうとする Clarissa の、その内面の緊張こそを読み取るべきである。人生に対する過剰な(とも言えなくはない)この思い入れには、実は pessimism の感傷や、nihilism の絶望を寄せ付けぬ、一種独特の無神論者の使命感とでも呼ぶべきものが流れている。

As we are a doomed race, chained to a sinking ship (...), as the whole thing is a bad joke, let us, at any rate, do our part; mitigate the sufferings of our fellow-prisoners (...); decorate the dungeon with flowers and air-cushion; be as decent as we possibly can. Those ruffians, the Gods, shan't have it all their own way—her notion being that the Gods, who never lost a chance of hurting, thwarting and spoiling human lives, were seriously put out if, all the same, you behaved like a lady. (...); she thought there were no Gods; no one was to blame; and so she evolved this atheist's religion of doing good for the sake of goodness.

(pp. 86-87)

実際、悲劇的と言うなら、これ程悲劇的すぎる現実認識もなかろう。もはや神の摂理を峻厳なる運命として受容できぬという、控え目だが譲れぬ宣言である。愛妹の痛ましい無残な事故死を目の当たりに見たのが直接の原因であるが、Clarissa に託された心の痛みは、一面で、自然との素朴で無邪気な融合感を断念させる心傷体験の響きを持っている。他方、戦争の shell shock (砲弾ショックによる戦争神経症) によって、社会全体が機能低下の鬱状態に陥っている中、絶えず死の影に心蝕まれる現代人共通の嘆きも読み取れよう。ただ、人間疎外を強いる抑圧的社会や、醜悪に堕した人間性を、己の自殺で告発した Septimus とは違い、彼女の場合は外に向ける責任追求を一時留保している。「誰が悪いのでもない」という一つの人間肯定的見識は、確と現実を受け止めつつ、人間の真実の道は安易な真偽善悪の判断を差し控え、耐えて生きながらえること——その試練の必要性を逆に訴えることで、一層の impact を伴って読者に迫るのだ。現実屈せず、虚無的諦念にも冒されず、生きる以上は主体意志で生きねばならぬという彼女の潔い気概こそ、魅力の最たるものであろう。苦悩する同胞のために、我が身を生贄(後でも触れる key word である)として祭壇に捧げてもよいという他愛精神が、彼女の party を意義付け、又、彼女自身の存在意義そのものの根幹を成している。高揚した heroism と呼べなくもない、この Clarissa の一種軽躁的な人生観は、意外にも忍耐強い、道徳的な、禁欲的な色彩を帯びているのである。

しかし、Clarissa 像が望ましい美德の漆喰で塗り固められている訳では決してない。皆の信頼と敬愛を一身に集める存在であると同時に、終始一貫、鋭い批判の目に晒されている事実が厳としてある。女性的でありすぎるための二律背反の命題は、女性性そのものに対する作者自身の ambivalent な感情をも、逆に浮き彫りにしてくれると言えそうだ。Woolf が指摘する「女性的すぎること」の欠陥の一つは、軽薄、世俗的に過ぎるということだ。脂ぎった拜金主義や成功第一主義とまではいかないものの、「彼女に関してははっきりと言えることは、彼女が世俗的

であること、上流社会や世間での出世のことを気にしすぎることであった。それはある意味で本当のことだった」(85)のである。かつての恋人 Peter Walsh は、Clarissa が有名人に取り巻かれて優越感に浸っている、「よそよそしくて、薄情な、おすまし女」(10)であり、或いは、目立ちたがり屋の snob「俗物」(134)であるという皮肉を述べる。又、娘の家庭教師の Kilman 女史は、常日頃 Clarissa の偽善者の皮を剥ぎたい衝動に駆られているのだが、密かに「お馬鹿さん！おめでたい人！あなたは悲しみも歓びもご存じないのよ。ご自分の生涯を無駄にしているだけよ」(138)と、憐れみ、軽蔑している。独りで生計を立てて、我執に生きる Kilman 女史にすれば、恵まれた環境の中で party「夜会」の成功にのみ腐心をする Clarissa であればこそ、お上品な慈愛の女主人役でいられるのだ。Clarissa 自身、無為の生活にともしれば埋没しかねない危惧を覚えて、夜会という単なる社交儀式に、必要以上の意味付けをしないではいられない——その切実な人生の目的喪失感を嗅ぎ取るのは、Kilman ただ一人ではあるまい。日常性から身を翻して高みへと舞い上がろうとする、いわば自我防衛本能に駆られた現実離脱の無意識の欲求が、何よりも彼女のくだんの日常的世俗性を証明することになる。

確かに、現世密着的な snobbery は Clarissa の本質の一面を物語る。「私はつまらない人間で、頭がからっぽで、馬鹿なおしゃべり女にすぎないのよ」(49)と卑下する彼女の自己嫌悪の言葉は、額面通り受け取れないものの、一見、主人公失格と紛う程である。常識や教養に欠けているという描写は、さらに一層深刻さを増している。

An offering for the sake of offering, perhaps. Anyhow, it was her gift. Nothing else had she of the slightest importance; could not think, write, even play the piano. She muddled Armenians and Turks; loved success; hated discomfort; must be liked; talked oceans of nonsense: and to this day, ask her what the Equator was, and she did not know.

(p. 135)

社会的名声の美酒に酔いしれる体質に加えて、上の引用文でも明らかな通り、彼女の社会的無知・無関心さは隠すべくもない。当時国際世論を沸騰させていたアルメニア人の大量虐殺問題についても、何の興味も同情も覚えぬと公言して憚からぬのである。一般的に言って、社会的、政治的問題に、分析的な、批判的な関心の目を向けるのは男性であるが、Clarissa は個人身辺の、ある一定空間の平穏無事にのみ関心を払う、如何にも小市民的女性という設定なのだ。生活の基盤を個人的な身の回りの空間に限定することで、見せ掛けの自己安泰を図るのは、女性の女性たる所以であるとする作者の主張である。とにかく「人生をひどく楽しんでいた。楽しむというのが生来の性質だった」(87)という指摘を考え合わせても、自らの視野を狭めることで、逆に限界のある立場を余儀なくされる Clarissa を示唆するのだ。さらにもう一つ、女性的でありすぎるための弊害として、現世的な秩序志向、保守傾向、「因襲的な傾向」(55)が挙げられよう。Septimus や Peter などの男性たちが、ある意味で、現実への適応障害を起こして、社会的脱落者に堕していることを考えると、一概に女性的な環境適応能力が悪しきものとは断定できぬ。しかし、その女性特有の安定志向は、得てして過剰な適応様式を生む。それが欠点となり、Clarissa に顕著に見られるということだ。最後まで触れるが、外なるもの(社会的秩序・規範・他者存在なども含めて)に阿ることで、偽りの自己安泰の仮面を被っているのが、ヴィクトリア朝の社交婦人の特権を満喫している彼女である。病的なまでに同調的傾向を深めるのも、又、自己犠牲的な程に他人志向であるのも、この範疇の中に入るのである。

女性が高い教養を身につけ、視野を拡大し、理論や教義や合理精神で武装をするに伴い、それまで危うい均衡を保っていた自我空間の中に亀裂が生じ、自我解体の憂き目を見ることが、今日的な女性問題として論じられる。ユング流に言えば、animus (アニムス：女性にとっての内なる男性的人格要素) に呑み込まれた、悲劇の女性の問題である。その点では、先に見てきた様に、Clarissa は心配無用だ。彼女は、内なる animus に未だ目覚めてはいないのである。否、feminist として名を成す作者 V. Woolf の存在を背後に意識するなら、無理に時流に逆らうべく軌道修正を受けている。To the Lighthouse 『燈台へ』の中に出てくる Mrs. Ramsay の場合と全く同様に、極めて限られた生活空間だけを、母性的な慈愛の光で照らすことで満足するという諦観を強いられているのだ。しかし、神の声の幻聴や召命感に苛まれる Septimus が、結局自分こそが世界救済の偉大な使命を担っているというキリスト妄想を抱いて発狂するのに比べると、Clarissa が狭い身辺空間であれ、それを譲れぬ最後の砦として人生に立ち向かう気概を見せているのは、むしろ健全、賢明な現実主義と呼べなくもない。実際、かように功罪相半ばする女性性が、彼女には混在しているのだ。受身で、従順な、伝統が定める女性同一性を、無批判で受け容れる一方で、逆説的にその女性性を逆手にとって、「生」の拠り所として信奉するところがみられるのだ。

伝統的な女性同一性の粹からはみ出た、Clarissa に特徴的な女性性の歪みについても触れておかないと片手落ちになる。その歪みこそが、現代女性にも通じるものだと、言って言えなくもないからだ。作品中一度も、Clarissa の口からは正面切った男性批判の言葉は聞かれない。又、Kilman 女史のように、無理に己の女性らしさを抑圧して男性的に振る舞うという、現代女性の轍を踏むところもない。しかし別の意味で、男性性を頑なに拒絶する、激しい男性不信の心情の吐露を感じない訳にはいかないのである。つまり、彼女は攻撃や破壊、戦争や殺戮を、男性本能の成せるものとして忌み嫌うことで、間接表現ながら、女性としての存在意義を発揚している。彼女が自分の守備範囲の生活空間を自ら限定し、次の二章で述べる様に高みの精神的空間へと逃避する傾向を見せるのも、男性原理が支配する殺伐とした現実世界に対して、確然たる愛想尽かしをしているからと言えよう。又、Peter が手で弄ぶ knife が彼女の生理的嫌悪の的となるのも、それが幼児的攻撃性や、物事を容赦なく切り刻む男性的批判精神を象徴するからであり、又、無論それが phallic symbol そのものだからである。思えば、彼女がかつて Peter の情熱の求愛を拒んだのも、当然すぎる成り行きであった。彼女にすれば、男性との個人的な愛の結合は、己の自我領域を侵害されるという恐怖以外の何物でもない。V. Woolf が描く女性たちは、概ね男性を遠ざけようとする性的潔癖症の傾向が強いのだが、それは偏に、己の精神的自由を侵されることを極度に恐れるからだ。性愛が男性の支配欲の手段と化していることへの、強い反発があるからだ。「人間には尊厳が、孤独がある。夫と妻の間にさえ深淵がある」(132) という感慨は、夫婦の場合でも、性愛抜きに関係にして始めて互いの精神的自立や尊厳が保証されるという、Clarissa ならではの感慨なのだ。外には伝統的な慈母の外衣をまとい、内にも汚れなき性的純潔さに執着するのは、肉体的情欲から解放された女性性だけが、女性の尊厳を守る手立てとなり得ると考えるからであろう。成熟した女性性の拒否に、作者自身の病的なまでの心理的屈折を読み込むかどうかは、又、別の問題である。

## II

Clarissa の魅力は、彼女の健気な外向けの人生態度だけではない。作者に言わせれば、Clarissa が単なる有閑マダムに終わらずに、魅力的な主人公の資格を持てるのは、彼女が日々の労働

から解放されて「ものの埒外にいて傍観する」(10) ことのできる、精神の自由空間を持っているから、という理由に尽きるだろう。Woolf 的な生命原理を体現し、「生」の reality に迫れるのは、地上的な我欲の呪縛から解放された、精神的自由がその絶対的条件になるからである。彼女には、前述のあの表層的な世俗性や無教養をも中和して余りある程の、豊かな内面的感受性を授けられているのである。純粹保存した異次元の内的空間を足場に、人生や死の意味を考えたり、又、木の葉のそよぎに宇宙の生命の息吹きを感じたりするのである。死の諸相は蔓延している現実社会に生命力の躍動を体感し、それを「美」の遍在という表現で訴えている Septimus の、その animism 感受能力を Clarissa も共有しているのだ。「世間から隠遁して、務めを免除されている」(134) ことに、彼女自身若干の後ろめたさを感じているのも事実なのだが、現実世界から退避し閉籠る休息の部屋——女性ならではの子宮空間、創造的体内空間と呼べようか——を持ち得ることで、辛うじて「内」と「外」の危うい均衡を図っている。重々しい社会的自我(彼女にすれば、完璧なる hostess 役であることに己の存在意義を懸けている)の鎧を脱いで、安心して生命力の充溢を図れるのが、心を癒す、清めの場たる attick room なのだ<sup>1)</sup>。

この「屋根裏部屋」空間が、都市生活者の Clarissa にとって如何に大きな意味を持つかは、強調してし過ぎることがない。もはや彼女が pastoral 的自然との融合に、心の絶対的平安を見い出せなくなっていることはすでに述べた。彼女は「田舎よりもロンドンを歩く方が好きだわ。本当に田舎を歩くよりいいのよ」(8) と雑踏を愛する都会者宣言をして憚らぬのだ。彼女の夫や娘が、都会の喧噪を離れた田舎生活に憧れを持っているのとは対照的である。そもそもロンドンのような大都市の生活環境は、価値の多様性を許容し、互いに個人の精神領域を侵害しないという不文律を成立させてくれる。田舎社会のように、濃厚な人間関係や一律的な価値観や文化を否応なく押し付けてくる訳ではない。魂の不可侵性を強く唱える一方で、「常に他人を必要としていた」(87) Clarissa は、その相矛盾する欲求のために、本来的に故郷喪失の運命を背負っている。女性的な融和世界を求める傍ら、孤独に執着し容易に他我の接近を許さない<sup>2)</sup>。個人レベルでの性愛の不毛を訴える傍ら、もっと広い普遍的人類愛を唱道してやまない。とまれ、群衆の中の孤独者の立場を鮮明に打ち出しつつ、神経症的な「山アラシのジレンマ<sup>3)</sup>」に陥った現代人の苦悩を代弁する Clarissa ではある。部屋の戸を閉ざし外界からの恐怖の直接闖入を阻止し、なおかつ小窓は開け放って外界への呼吸口は確保するという周到な両面作戦が、正しくその「山アラシのジレンマ」の中で、必死に息づき伸縮しようとする自我空間のメカニズムをいみじくも示唆してくれる。部屋や建物と、人間の心理構造との関連性は、陳套にすぎる文学的テーマであろうが、敢えてそれに言及してその部屋の意義を述べるとすれば、この閉じた扉と開け放った窓の構図は、Clarissa の自我を被う防御膜が元来透過性のある脆弱な screen であることを意味していると言える。それだけではない。彼女が、その自我境界の透過性を、伸縮自在にコントロールする調整能力も手中に収めているという事実が大切である<sup>4)</sup>。自我被膜が脆弱な screen であればこそ、さらに二重に社会的自我の堅固な甲冑を纏って身構えねばならぬ訳だが、同時に通気孔のある防御膜であればこそ、休息時の束の間の自我解放も可能になるのだ。

Clarissa は外的脅威の侵入の恐れのない時(例えば、シャフツベリー街を走るバスの中や、雑踏の中を徘徊する時、或いは attick room での寛ぎの時など)に、己の無名性が保障されていることを確認した上で、自我空間の窓から新鮮な外気の中へと「飛び込む」(plunge)のである。魂の肉体遊離、或いは脱魂とも言うべきこの幻想体験は、Clarissa にあっては、抑圧から解放された精神性の、その自由奔放さと同義になっているのである。

(...) she felt herself everywhere ; not “here, here, here” ; and she tapped the back of the seat ; but everywhere. She waved her hand, going up Shaftesbury Avenue. She was all that. So that to know her, or any one, one must seek out the people who completed them ; even the places. Odd affinities she had with people she had never spoken to, some woman in the street, some man behind a counter—even trees, or barns.

(p. 168)

この自我解放、自己遍在の神秘的幻覚に、著しい積極的な創造性を発揮させようというのが作者の立場である。自我被膜の通気孔から流出して、柔らかな生命体となって空中を漂う——それによって、一瞬にせよ全能感にも似た「生」の歓喜が得られるのであろう<sup>5)</sup>。このような創造的自我解放能力を備えているのは *The Waves* 『波』の Bernard の場合も同様ではあるが<sup>6)</sup>、特に Clarissa にあっては、それは彼女の他我・他者存在に対する献身的共感性を傍証するものとなっている。人間存在の孤独や不安、狂気や絶望などを象徴している Septimus 夫妻とは違って、同じ土俵の上にあっても、なお人間同士の友情や同胞愛を信じようとする Dalloway 夫妻である、と対比もできよう。個としての不可侵の個性と尊厳を認めた上で、なおユングの普遍的無意識の概念にも似た宇宙的生命力の見えない糸で、人間同士互いに根底で結ばれているという人間理解の態度である。単に、恵まれない社会的弱者にだけではない、彼女の当面の敵役である Kilman 女史や Bruton 令夫人、或いは、全く一面識もない Septimus に対しても、深い愛着や親近感を抱いてしまうのだ。Clarissa がこよなく孤独を愛しながら、それでも Septimus の様に外界から遮断された暗黒の淵に陥る心配がないのは、かような瞑想的 trance 状態の中で、他我との融和体験を果たせるからである。

自我解放によって可能となった、他我とのその融和体験が、一方通行のままで、自己満足の幻想のままで終わるものでないことは強調する必要がある。Clarissa と他の 2 人の場合を例にとり、彼らの自我空間の被膜を比較することで、Clarissa の臨機応変に伸縮する自我メカニズムは説明できると思う。先ず、些か滑稽に過ぎて描かれている敵役の Kilman 女史の場合、彼女の自我空間は、外界から全く隔絶した窒息状態にあることが容易に推察される。何故なら、彼女は年がら年中同じ薄汚れた、汗臭い mackintosh coat 「防水外套」を着ているからだ。その外套が、外気の流入を阻む、酸欠状況を強いる、融通のきかない自我被膜をいみじくも象徴している。彼女自身、「自分を破滅させるものは、この自己中心癖 (egotism) だ」(145-146) ということを理解している。この忌むべき我執のために、外からの生命力の補給も阻まれ、共感を抱くことも感情移入も不可能になっているのだ。自分の醜い容貌や貧しさのために劣等感の虜となり、彼女を嘲笑し見捨てた世間に対する怨念に憑かれて、「魂全体が錆びついてしまった」(14) のである。抑圧した情欲や煩悩のために「今にも自分はバラバラに破裂してしまう」(145) という思いを募らせる。Clarissa に対しては、ひととき攻撃性を露に剥出して、彼女の欺瞞性や偽善性を暴露しようとする——いわば、名前 (kill man) の如くに、傍に居るだけで他人を拷問にかけて殺してしまう夢魔的存在と成り果てている。彼女に唯一残された歓びである食事の際の、グロテスクに開いては閉じ、閉じては開く彼女の手のうごめきが、彼女の自我空間の悲劇性を何よりも如実に物語ると思う。

次に Septimus の場合、彼には自我防御膜は無きに等しい。「彼の肉体は溶けて、神経繊維だけが残っている。それが岩の上に、ヴェールのように広げられている」(76) からである。緩衝帯としての肉体そのものの喪失、神経体の痛ましい露出は、社会的・外的自我層の崩壊によっ

て、外界から直接「雷鳴のような恐怖」(96)が、柔らかな内的自我の中核へと侵入することを示唆する。分裂病者の、見透かされ、晒され、見抜かれ、監視され、悪口を言われるという注察・迫害妄想は、自我被膜の防御機能の破綻が来たとす、被害的内容の異常体験であるが、実際、Septimus も、その「見つめられ、指さされ、(……)重しをつけられ、釘づけにされる」(18)という、正体不明の不気味な他者からの不条理な虐待を訴えるのである。因みに、Septimus に見られる他の妄想型分裂病症状を列挙すれば、何か邪悪な内容の独語(72)、突然の空笑(74, 154)、自分をうわさし嘲笑し悪態をついている声の幻聴(74)、飛行機の広告が自分だけに何か合図をしている(25)という、知覚対象に特別の意味付けをしてしまう妄想知覚、今にも何か恐ろしいことが起こりそうな(18)妄想気分、窓ガラスを通して見る(97)ような離人症的な現実感喪失、「感じられない」(96)という感覚喪失等々、教科書的症例には事欠かない。「感じられない」のは、自律的な防御機能を喪失しているために、自我空間を全面的に外界から遮断して、自閉の殻の中へと己を封じ込めてしまう(それ自体、最終段階の防衛行為と言えなくはない)からで、彼は確実に発狂の入口に立っている。飛行機が煙で空に描いた広告文字は、Septimus にその合図の内容を確信させないままにやがて霧散し、人間的意味が全て空中分散して消失してしまった暗黒の世界に、彼を独り置き去りにしてしまうのである。

Clarissa の場合は、彼女の自我被膜を象徴するものとして、銀色の evening dress を例にとろう。屋根裏部屋の意義に言及した時に、すでに彼女の自我境界が通気孔を備えた、伸縮自在の screen であること、そして同時に脆弱なものでもあることを指摘した。この evening dress も常に綻びができて、party の前には必ず屋根裏部屋での繕いが必要である。しかし、一旦それに身を包んで彼女が夜会に姿を見せるや、出席者一同の讃美や驚嘆を呼び起こさずにはおかない程の、威厳の輝きを発するのである。言うまでもなく、この「人魚のドレス」(191)は、無定形の水々しい流動体である彼女の内的自我を形象化して、女性的潤いに満ちた、hostess 役としての彼女の自信と誇りの充足ぶりを見事に演出してくれる。但しこの dress は、夜会の人工照明の中では銀緑色に燦然と輝くのだが、「太陽の光の中では色褪せて見えた」(42)という註釈付きで、party という人工的幻想空間でのみ、有効な魔力を発揮するのだ。そもそも人魚は、陸と海の両方の世界に生きられる、両方を自由に往き来できる生き物である訳だが、Clarissa も陸の世界(男性的原理が支配する外的自我の世界)では、快活な社交婦人として成功をし、又、海の世界(女性的原理が支配する内的自我の世界)でも、唯一、流動する生命体となって自我解放も果たせる存在である。又、party で彼女が充足した恍惚状態で出席者の間を泳ぐように進む姿は、昼と夜、つまり覚醒と夢、意識と無意識といった二つの世界も、同様に自由自在に往き来できる存在であるという確信を持たせるのである。

透過性・侵透性を備えた、自律的な自我境界を持つことが、V. Woolf 的な生命原理にとって殊更大切であるのは、それが人間が持つ本能的な願望や衝動と、相即不離に係わっているからだ。人間なら誰しも、本来的に二つの相反する欲求を持っていると考えられる。一つは、己を確実不動の、絶対的存在にしたいという物化欲求であり、又もう一つは、流れる水のようにいつまでも、自由な無定形の生命体として漂いたいという流動化欲求である<sup>7)</sup>。この dichotomy 的な二項対立の図式は、古典主義と浪漫主義、Hebraism と Hellenism のように、もっと大きな人間的営為の思潮としても具象化しているが、一個の人間の心理にも同時に内在していると考えられる。内的自由を満喫する Clarissa ではなく、ペルソナの仮面を被った Mrs. Dalloway として、誰からも信頼される堅固で強靱な統合体の外的自我を構築したいと願う衝動は、前者の物化欲求(換言すれば、結晶化欲求)の要請である。例えば、彼女は spiritual な高みの内的空間

から、階下の現実的社交空間へと降り立つ前に、必ず舞り場の鏡の前などで立ち止まって、その鏡の中を覗くのである。自己確認の手続きを踏むのである。

How many million times she had seen her face, and always with the same imperceptible contraction! She pursed her lips when she looked in the glass. It was to give her face point. That was her self—pointed; dartlike; definite. That was her self when some effort, some call on her to be her self, drew the parts together, she alone knew how different, how incompatible and composed so for the world only into one centre, one diamond, one woman who sat in her drawing-room and made a meeting-point, a radiancy no doubt in some dull lives, a refuge for the lonely to come to (...).

(p. 42)

戦場に赴く勇者の如く、決死の覚悟で己の内的自我を召集して、戦いのための準備を整えるかの様である。一旦、表層へと召集された内的自我は、錬金術の魔法を受けて変質し、正しくダイヤモンドの光沢と硬度を獲得するのである。護衛兵が居眠りをしているような「無防備な女王」(49)から、「尖った、投げ矢のような、はっきりとした」存在、「鉄のような燧石すいせきのような」(72)硬い実体へと変身を遂げるのである。優柔不断で感傷的な性格もあって、50歳を越えた今でも永遠の青年願望に憑かれて、未だ成熟した、責任ある社会的自我を確立できずにいるPeterにとって、Clarissaの魅力が結晶化を果たした際の、彼女の「勇気」、「社交本能」、「果敢に物事をやり抜く力」(69)であると告白するのも、頷けるというものだ。

他方、彼女が魂の自由を標榜し、自我解放をして、個を超越した宇宙的生命のリズムに身を任せようとしたのは、後者の溶解・流動化の欲求に依るものだ。先の結晶化の欲求本能を顕在化の欲求と言うのなら、この欲求は、現実世界から個としての姿を消し、心の幻想的地下世界でもある静謐の空間に沈潜しようとする、潜在化の欲求ということになる。Clarissaの屋根裏部屋は、新たな生命力の充填のために、自他未分化な魂の地下室に赴くための入口でもあった訳だ<sup>8)</sup>。彼女がブアトンでの青春時代に垣間見た、あの「無限に貴重で神秘的な」(40)法悦の啓示的瞬間——失われた栄光の時——を探し求めて、幾度となくブアトン回想に浸るのも、時間的遡行が可能なこの部屋の中で、流動化欲求に身を委ねるからだ。先に述べた「私の世界、自分自身が、もやの様に拡がり(……)持ち上げられて、遙か遠くまで拡がっていく」(11-12)という、全能幻想的な自我膨張感も、又、「自分の肉体が人には見えないという、目に見えなくて知られていないという、とっても奇妙な感じ」(13)の肉体透明感も、又、「我々という現象、外に現れた部分は、他のもう一つの部分、つまり広く拡がっている見えない部分と比べると、とても瞬間的なもので、見えないものが生き長らえ、死後もあれこれの人に結び付いて復活し、特定の場所さえも訪れる」(168)という靈魂不滅感も、全て帰する所、流動化・潜在化欲求のなせる業なのである。因みに、この無定形の流動体になりたいという欲求は、「生」の緊張を回避して、原初的な無機質的世界にまで回帰しようとする、いわば死の誘惑を内包している。現実世界に生きる個の有限性から離脱したいという流動化欲求が、必然的に死の衝動を孕むのが、V. Woolfの生命原理に於ける常なる特徴である。これら二つの対極的な、外から内へ収斂しようとする求心欲求と、内から外へ拡散・膨張しようとする遠心欲求が、互いに拮抗し合い、時として(後述するpartyの場面での様に)美事な均衡の調和を見せてくれるのがClarissaなのだ、とする主張が作者の最終的眼目のはずである。



## III

しかし、落ちてくる滴を掴まえようとするかの様に、「瞬間の真只中に躍り込み、瞬間を釘づけにする」(41) ことを身上としていた Clarissa も、日々単調な環境の中に身を置いて、自分が日常性の中に埋没してしまいそうな危惧を覚えることが、最近頃に多くなってきている。外的刺激に生き生きと呼応して、不断に流転・変化するはずの心が、彼女が無意識にも、狭い安住の生活空間を守ることに拘泥するようになるにつれて、停滞し、麻痺しかかっていると言えよう。伸縮性や流動性を旨とした彼女の生命原理が、破綻を来しそうな深刻な事態に陥っていると言えよう。勿論それは、己の肉体的衰えを、究極的には死を自覚せざるを得ない、初老期特有の抑鬱状態に Clarissa が落ち込んでいると、そう解釈するのが一番妥当である。実際、「彼女は、突然萎み、年をとり、胸の膨らみもなくなったと感じ」(35) てしまったのだ。この切実な老いの自覚は、「年毎に自分の分け前が薄切れとなって、残された生命には、若い頃のように生活の色合いや味わいや音色を、引き延ばしたり吸収したりする能力が、もはや少ししかない」(34) という、生命感情の低下をもたらさずにはおかない。そして、作品の冒頭で、朝の新鮮な冷気の中に飛び出す (plunge) 時に感じた、あの体を貫く「生」の感激や歓喜が一挙に色褪せてしまう。これから飛び込ん (plunge) で水に潜ろうとする潜水夫の、あの不安と期待に胸躍らせることもない。陸と海の両方の世界を自由に往き来して、人魚としての特権を満喫していた Clarissa であるが、もはや彼女にはそれが許されないのだ。本当はまだ朝なのに、「ぞっとするような夜」(35) と錯覚する程に、外的世界が一挙に暗転してしまう。外界の突如とした変容感、Septimus の「体が落下していく」(97) や「下へ下へと焰の中へと落ちていく」(155) といった、分裂病の急性パニックほどではないのだが、彼女が拠り所とする人間関係の絆から彼女を引き離して、離人症的な暗黒の淵へと引きずり込む機会を窺うのである。まるで不安発作のような、「氷のように冷たい爪が、彼女の肉体を突き刺すような突然の恐怖」(41) なのである。

内的生命力の衰退が、心理的時間の流れを淀ませるのは当然すぎる帰結である。刻々新たに瞬間を生きようとすることは、此の上なく苦しい努力を己に課すことでもある。しかし、前提となるべき生命エネルギーの貯蔵水位が下がるにつれて、瞬間の連続性が損なわれてしまって、内的持続に亀裂が生じてしまうのだ。人生をこよなく愛し、「人生を瞬間毎に新しく創造する」(6) ことに無上の歓びを見い出していたのに、今や、「彼女は時間そのものを恐れた」(34) のである。瞬間への愛着を見せた心が、「たとえ一日でも生きていくのは危険だ」(11) という不安を洩らしてしまう。瞬間は、甘美で貴重な、ダイヤモンドの神秘的輝きを失ってしまった。今ここに至って、裕福で安楽な社交生活とは正しく裏腹な、老いの予感に怯えた、緊迫した内面生活を強いられている。時として、自ら流動化し、時空を超えた自他未分化な、生命母体的な流れの中で漂う歓びも味わえることが、Clarissa の魅力的な天分であった。充滿した活力があったこそ、そのような自我膨張という憩いの瞬間もあったのに、もはや猶予がない。流れに身を託すことは、生命的な歓びではなく、今や存在不安を募らせるばかりになっている。

漠然とした不安ノイローゼに罹った患者の多くがそうであるように、Clarissa も病気(インフルエンザ)の後、めっきり白い髪が増え、生命力の根源的リズムを象徴する心臓の不調(6)を訴えている。更年期障害のひとつの症状と言えないこともない。更年期は、それまでどうにか危うい平衡を保っていた personality の統合性が揺らいで、抑圧していた内的葛藤が徐々に顕在化してくる時期でもある。Clarissa の場合は、選択以前の当然のもととして受け入れてきた、女性的役割同一性についての無意識の ambivalent な葛藤が、大きな不安を生じている。かつ

て彼女が自分の生き方、生きる姿勢について考え悩んだことは、恐らくなかったはずだ。しかし、残り少なくなった人生を目の前にして、否応なく、それらの再検討を余儀なくされている状況ではないのだろうか。「私の人生で何を作り上げたのだろう。一体何を」(48)と、自問せざるを得ない。いつの間にか過剰とも言える適応主義のために、愛想の良い、健気な、外向けのペルソナの仮面ばかりを、堅牢に築き上げることに精力を使い果たして、結果的に、私的な内的自我の世界を疎かにしてきた、という反省であろう。「ああ、もし人生をやり直すことができたなら、どんなにかよいのに。せめて違う顔かたちで、生まれ変わったら」(13)と、心密かに想うのである。本来あるべき自分と、現実にある自分の分離意識が、こんなはずではなかったのにという焦燥感を沸き立てて、つい変身願望を抱かせるのであろう。Clarissaが直面していると思われる、彼女の内的自我の存立に関わる負荷状況を整理してみると、次の様になると思う。

①互いに信頼し愛し合っているという自信はあるものの、言葉さえ余り交わさぬ夫との疎遠の問題、②家庭教師との争奪戦の中にみられる、娘の自立と親離れ、それに伴う荷降ろし感情の問題、③拭い去れない人生の目的喪失感、社交生活そのものの倦怠の問題、④病的と言わざるを得ない、地上的肉体性(スキン・シップ欲求)の欠如の問題、⑤自我解放の自己完結性の問題などである。とにかく「生活の中心の屋根裏部屋には、空虚さがあった」(35)という指摘が、何よりも彼女の陥っている「空の巣」症候群(empty nest syndrome)を物語るのである。Clarissaの内的自我は、潤いを失い、硬直し、萎縮してしまっている。肉体の衰えや生命エネルギーの減退を自覚した抑鬱状態であればこそ、不安はより一層増幅される。そして、肥大化した社会的自我が、干乾しのように形骸化したまま残されるのだ。自我解放を行い、内と外の生命交歓をしたくても、もはや不可能な状態なのである。

そもそも、Clarissaの性格自体が、更年期鬱病に罹って然るべき親和型性格であったことを最後に触れておきたい。彼女の自我空間が不変不動のものでなく、通気孔を備えた、伸縮自在なものであることは、繰り返し述べたが、その内的生命力の干満や上昇・下降のイメージは、生理的な体内リズムの概念と容易に結び付く。つまり、心臓の鼓動のような、rhythmicalな収縮・膨張の周期的運動である。さらに、その心臓の鼓動に代表される体内リズムは、自然界の宇宙的生命リズムを代表する、rising and fallingの垂直運動を周期的に繰り返す、波のうねりに繋がるのである。寄せては返し、返しては寄せる、果てることのない、波の永却回帰のイメージが、V. Woolfの好んで用いる典型的な生命概念であることは、又周知の事実であろう。波間に漂って揺れる生命リズムが、自我解放の歓びを生じることが既に述べたが、つまりそれが精神の高揚と抑鬱のリズムそのものであるからだ。生命体の膨張・収縮を旨とする生命原理は、本質的に精神の高揚・沈滞を特徴とする循環気質的性格(躁鬱病好発的性格)と、非常に相通じているのである。一章で述べた、Clarissaの温厚で善良な、生来人との争い事を避けようとする同調的性格も、皆から信頼される、精力的で快活な社交婦人であろうとした発揚的性格も、楽天的で呑気な享楽的性格も、又その反対の、孤独を愛する、寡黙な陰うつ性格なども、全て循環気質者の特徴として挙げられているものなのである。さらに述べれば、現世的規範に対する順応性や世俗性、強迫的なまでの自己犠牲精神、使命を全うしようとする良心的な責任感なども、躁鬱病になりやすい循環気質者の特徴である。

一言で言うと、「他人への過剰とも言える配慮」が、循環気質者の対人関係に於ける特徴であるので、この点からClarissaの鬱病症状をもう一度見てみたい。彼女は他人を気遣う優しさを持ち、他愛傾向や他人志向を見せていたが、今や、自分が他人にどう評価されているかに、病的に神経質になってきている。自己評価を他者存在に依存する他律傾向が、病気以後、殊に顕

著に目立ってきている症状のひとつと言える。確かに、もともと「彼女が優しく鷹揚な心でいられるのは、召使いたちが彼女を助けてくれるから。彼女を好いていてくれるから」(44)という、周囲の人の信頼を自らの安らぎの糧として感謝するところがある。しかし他人の敬愛の眼差しは、彼女の自己愛補給のエネルギー源として、彼女を上へ上へと持ち上げてくれる「波」(16)にまでなる。街から自宅に帰った時、召使いたちから自分の存在を是認され、生活空間が以前と同じ安全な砦であると確認するや、その瞬間「祝福され、純化された」(33)と感じてしまう。逆に、Bruton 令夫人が昼食会に夫だけを招いて、自分だけが邪魔者にされたという思いが、「彼女の佇む瞬間を、根底から震わせてしまった」(34)のである。万事に於いてこの調子なのは、誠に神経過敏な反応と言わざるを得まい。棄却体験に似て、自分独り人の輪から脱落する恐怖なのだろう。人は誰しも愛されることを望み、愛されることで自己存在の自信と安らぎを獲得する。しかし、瞬時瞬時に、その確証を他者(この場合、毎日顔を合わせている身内とも言うべき召使いである!)に求めなければならぬのは、如何に上流階級のお上品ぶった女性とは言え、極めて覚束ない自我防衛なのである。Clarissa の受身の女性らしさは、ここに於いても、破綻の危機に瀕しているのである。

内的生命力の減退が契機となって深刻化した、こうした精神的失速の危機も、一時的であるにせよ解消させる場面を用意されている。言うまでもなく、小説の最後に据えられている party の場面である。小さな幾つもの波の高まり(躁)や沈み(鬱)を、全て内に呑み込んでしまう程の大きな波(大いなる躁)の到来である。大波が海の育む生命力を一杯に孕んで膨らむ様に、Clarissa の内的生命力が蘇って、本来の大きさにまで内的自我を膨らませ、さらに自我境界の被膜を外へと押し拡げるのである。循環気質性格者としての、彼女の本領が発揮される、宗教的啓示にも似た、精神的高揚の栄光の瞬間である。萎縮した内的自我と形骸化した外的自我に、完全に乖離するやに見えた彼女の自我空間が、調和のとれた、充溢した全体性を回復する——奇跡の、神秘の演出である。心の癒しとは、正しく、この自己充足を果たす全体性の回復を指して言うのである。先に引用した自我の解放感や非実在感、肉体透明感などは、全てこの大いなる至福の瞬間のための伏線であり、前兆波だった訳だ。

Every time she gave a party she had this feeling of being something not herself, and that everyone was unreal in one way ; much more real in another. It was, she thought, partly their clothes, partly being taken out of their ordinary ways, partly the background ; it was possible to say things you couldn't say anyhow else, things that needed an effort ; possible to go much deeper.

(pp. 187-88)

個にあって、個を超越する。瞬間にあって、永遠の相を見る。生にあって死を見、死にあって生を見る。こうした無心の、宗教的陶醉の境地に立てるのも、隣りの老婆を窓越しに見たり、Septimus の自殺を擬似体験したりすることで、Clarissa 自身、己の女性性を最大限に発揮しながら、己の使命を全うする覚悟を決したからである。「捧げ物、ひとつに集めること、創造すること」(134)に要約される、party の hostess 役、延いては「生」の hostess 役としての社会的自我の使命を、である。作品の title が、Clarissa Dalloway ではなく、彼女の社会性を強調する Mrs. Dalloway となっている所以である。それは、個として己を物理的時間の中に定着させ、

現実社会の住人とならしめることである。我が身を生贄として、祭壇に捧げることである。己を殉じることで、己を活かす。従容として死を抱擁することで、魂の癒しを受けるのである。

故郷を失った都市生活者としての Clarissa にとって、party とは、失われた故郷の年中行事の「祭り」の意味を持つ。彼女自らが祭司となり、自分自身と他の皆のために周期的に催す、魂の浄化のための、ひとつの祝祭的時間であると言えるだろう。日常性のしがらみを超越し、宇宙生命のリズムの波に同調して、自らを投げ出す、死と再生の厳粛な儀式である。しかし、V. Woolf の描く party の祝祭的意義については、又、稿を改めて論じることにはしたい。

## 註

『ダロウェイ夫人』のテキストは *Mrs. Dalloway* (London: The Hogarth Press, 1968) を使用した。作品中より引用する場合は、括弧内の数字によってその引用頁を示す。

- 1) V. Woolf 自身, “Street Haunting” という essay の中で, 「ドアが閉じると, そうした全てのものが消える。我々の魂が囲い込むために, 分泌していた殻のようなおおい——他の人々とは違う形をとっている個々のもの——が, 破られて, 中の知覚する oyster (カキ), つまり, 巨大な眼が残るだけとなる」と述べて, 社会的自我が, 本来脱着自在なものであることや, 内的自我が柔らかな知覚体である, との指摘をしている。

Collected Essays IV, (London: Chatto & Windus, 1969), p. 156.

- 2) 他人との融和を求める一方で, 他人に己の identity を侵害されることの恐怖を抱く矛盾については, 指摘する批評家も多い。二人挙げておくと,

James Naramore, *The World Without a Self* (New Haven & London: Yale Univ. Press, 1973), p. 95.

Jeremy Hawthorn, *Virginia Woolf's Mrs. Dalloway: A Study in Alienation* (Sussex Univ. Press, 1975), p. 12.

この他人との, いや人間関係を含めて, 自分と自分以外の外的なもの全てとの関係を, 如何に結ぶかは, 特に分裂病患者の Septimus が登場している *Mrs. Dalloway* に於いては, 大きな問題となる。自我と他我の境界線の希薄化, 対人的距離の取り方の障害, 共感能力の障害などは, 正しく今日の問題であろう。

- 3) L. ベラック, 小此木啓吾訳, 『山アラシのジレンマ』(ダイヤモンド社, 1983)

人間的過疎状況の中で, 他人の暖かさを求めようとする肉体接触の欲求に駆られて近づいても, 結局は, 互いの鋭い棘で傷つけ合うことになるジレンマを言う。Clarissa が, 異性との肉体的性愛を予め除外した上で, 女性的融和・共感世界を求めているのも, 他人への接近と回避の欲求のジレンマに対する, 彼女なりのひとつの解答であるかも知れぬ。

- 4) 「自我境界」は, 自我の結合性や同一性などを説明する時に用いられる, 自我心理学に於ける重要な概念である。市橋秀夫『空間の病い——分裂病のエソロジー』(海鳴社, 1984) は, 特に優れた入門書であり参考にさせてもらった。

- 5) この空中遊泳の自我解放感は, 精神分析のイメージ療法として, 実際に, 重症のうつ病患者の治療に利用されている。「覚醒指導夢」と呼ばれるもので, 目を閉じ, 仰向けに寝かせられた患者は, 治療の回数を重ね, 慣れるにしたがって, 「イメージのまま高空へと舞い上がり, 下界の美しい風景を眺め, 心ゆくまでわが身の軽さと世界の美しさを実感として満喫する。」藤岡喜愛『イメージと人間——精神人類学の視野』(NHKブックス, 1982), p. 84.

- 6) 拙稿「*The Waves* に於ける『引き裂かれた自我』の世界——Rhoda の病める肉体感覚を中心に——」(『南山英文学』第8号所収, 1983)を参照して頂きたい。

- 7) 石田春夫『心の世界から——精神科医の記録』(白水社, 1983), p. 54.

概ね, 人間の精神病理の発生原因のひとつとして, 人間が内在させる相反する衝動の葛藤を挙げる人が多い。この場合の「物化」, 「流動化」の欲求もそうである。又, 荻野恒一氏は, 対人恐怖の原因に, 人間

## 中年女性のための鎮魂曲

の持つ不条理な自己の隠蔽, 自己の顕示という相反する欲求を挙げて, 「人間の不条理ないし両義性こそ, 人間の根本特徴であり, 人間の精神病理も本来的には, この意味での両義性からくる」と述べている。『人間の精神病理はどこからくるか』(大和書房, 1980), p. 202.

- 8) 無意識の世界に退行することが, 社会的・外的自我と内的自我, それにアニマ(アニムス)などを統合した, 調和のとれた自我の統一性や全体性を目指す場合には, 非常に創造的な役割を果たすのである。